

1977～78年にかけての文学論争。背景に70年代のナショナリズム、社会改革運動があり、論争の前哨戦として現代詩論争がある(4号参照)。こうした情況のもとで、文学が本来的に継承すべき伝統をめぐって具体作品の再評価、発掘がなされ、日本統治下の抗日文学(頼和、楊逵)、戦後の台湾文学(鐘理和、呉濁流)などについて文芸誌で熱っぽい議論が展開された。この中から、現実凝視のリアリズムに対する志向が生まれ、のちに彭歌の「不談人性，何有文学」(聯合報1977.8.17～19)、余光中の「狼来了」(聯合報8.20)によって内外の注目をひく一大論争となった。民衆の側に立ち、かつ第三世界の文学として現実主義的、民族主義的な内容を追う郷土文学に対して、批判側は、「不正確な、甚だしくは有害な」もの、あるいは「工農兵文芸」「共産党の手先」として王拓、陳映真、尉天驄らを攻撃した。論争は77年8.29～31の「文芸会談」によりおさまった形になったが、本質的解明については今後の課題となった。

尉天驄(うつ・てんそう) 1935年生まれ。江蘇省出身、政治大学(台湾)卒、評論家。『文学季刊』主編、『文季』編集委員など。はじめ小説、詩、散文を発表するが、やがて文芸評論を中心とし、陳映真、黄春明、王禎和、七等生、施叔青などを文壇に送り、70年代以降、現実主義路線および台湾郷土文学の中心的人物となる。散文集『衆神』雑文『天窗集』、評論集に『民族与郷土』『路不是一個人走得出来的』および『郷土文学討論集』など多数。

60年代以後の欧米現代主義の氾濫と模倣は、台湾文学を貧血症にし、逃避的、非現実的なものにしたと批判、台湾の現実と風土に即した人間の文学の樹立、文学における真実性と民族性をあくまで堅持せよ、と主張した。

反共文学 50年代からほぼ10年ちかく中国文芸協会、中華文芸獎金委員会、中国青年写作協会によって提唱された「反共の戦闘文学」は《反共抗俄》を国とする台湾の“国防文学”といえよう。

王藍の『藍与黒』、姜貴の『旋風』『春城』『白馬篇』『重陽』、陳紀瑩の『荻村伝』などの作品が有名であるが、画一的で今では顧みられない。

(葉氏原稿をもとに編集部で整理しました—K)